

「三〇」熟語⑦ 三宝

企業経営漫談士 岡野実空

「三宝」とは、仏教で特に重んじられる「仏法僧」のこと。聖徳太子(いま厩戸皇子)が制定したと伝わる「十七条憲法」、「和を以て貴しとなす」に続く、「篤く三宝を敬え」で多くの人に知られています。ここではそれを「経営」に置き換え、「師」、「原理原則」、および「集団」というミドルの「三宝」について考えます。

その1: 師

「仏」とは本来、悟りを得た人、あるいは釈迦本人のこと。しかしここでは仏道を離れ、「経営」全体や、それを構成する各要素で、自分の「師」となるべき人のことをいいます。

さてその数は、人によってまちまち。多くの社会人の場合、いきなり釈迦のような尊師に出会うことは奇跡に近いので、自らの成長に合わせ、「師」を見直していかなければなりません。もしそれが止まったら、要注意！その先に待っているのは、恐らく「独善」による停滞や墮落への道です。

それを防ぐポイントは、剣豪・宮本武蔵や経営の神様・松下幸之助が実践した『我以外皆我師』の模倣。偉人二人のように「皆」は無理としても、激動の世を生き抜くために、新たな時代の息吹を感じる後輩たちは、必ず「師」に加えたいものです。

その2: 原理原則

仏道における「法」とは、真理のこと。それを「物事が存在し、その状態を保っている要素」と読み解けば、企業などの「経営」においては、「本質」や「原理原則」に該当します。

上記の「師」が説くそれらが重みをもつのは、その豊かな「経験」に裏打ちされた「知識」であるから。自らの五感や身体を使って会得されたさまざまな「見識」は、マスメディアなどをつうじて得られる「知識」などとは一線を画すものです。

それに関して決して忘れることができないのは、これまで実例として、最も多くの言動を紹介してきた元菱食(現三菱食品)トップ・廣田正氏の言葉。コラムでの無断使用を後日お詫びした折、「私が言ったこと、やってきたことは、すべて先輩や他の人から学んできたもの。私に独自性などないので、わざわざ了解を取る必要はありません」と。それは四半世紀を経て、「師」が生涯学び続ける姿勢の「本質」を初めて垣間見た瞬間でした。

「三々な経営」

E-32 先達の遺訓② 畠山芳雄氏、
E-33 先達の遺訓③ 大口右造氏

* 廣田正氏関連コラム

0-20 経営者の要件 0-26 超一流経営人の特徴
1-16 経営資源を考える 3-1 まじめを考えなおす
3-20 認知バイアス② 組織編
E-14 人間の本性が見える場面

その3: 集団

本来の「僧」とは、中国や我が国のような個人ではなく、仏道修行者の集団、「僧伽」のこと。ここでは、良い「経営」を目指し、絶えず「切磋琢磨」する集団のことを意味します。その目的は、お互いが励まし合い、善きライバルとなって、「事業力」と「人間力」を高め合うことに他なりません。

また「組織」の視点では、それをつうじて得られる「相乗効果」が極めて大きな魅力。そのために近年、多くの組織で「多様性」のスローガンが掲げられてきたことは言うまでもありません。

しかし、ここで特に強調しておきたいのは、いま「多様化」自体が目的化し、それを楯に追究されるべき本来の「目的」が蔑ろにされているという現実です。そのうち、「相乗効果」による「違い」の創出はまだしも、その対極にある「普遍性」の追究については、ほとんどの組織が気づいていません。お互いの「意見」の「違い」をぶつけ合いつつ、そこに「共通」する概念を見出すことは、「差」の追究と同等の価値を持つものです。

最後に、以上のような議論を阻む主因は、我が民族の強い「同調圧力」。そしてそれを打ち破る秘法も、なんと「毒を以て毒を制す」の「同調圧力」。お互いに真価を認め合い、「差」と「普遍性」の追究という一石二鳥を目指し、あらゆる組織の議論の場に、『我以外皆我師』実践の「同調圧力」を！

2021年6月28日 実空